

水が逆流する「地下水障害」が発生しました。

昭和35年、田子浦港附近に塩水化した井戸が発見され、それ以後、年々拡大し、昭和48年ころには県道・沼津線の北側まで、塩水化の汚染地域が広がっていきました。

工業用水を水源転換

こうした、地下水障害防止に対応するため、昭和42年「岳南地域地下水利用対策協議会」が設立され、地下水の自主規制が行われました。

また、昭和46年には県条例によって、法的な規制も受けるようになりました。

昭和47年に県が行った立入調査によると、市内の地下水採取量は1日140万立方メートルで、安全揚水量の80万立方メートルを60万立方メートルも上回っていることがわかりました。

この地下水過剰汲みあげを減らす方法として、日本軽金属富士川発電所の放水を利用した「東駿河湾工業用水道」への水源転換が行われることとなりました。

第一次転換は、昭和50年2月に57社26万立方メートルが行われました。

それ以後、現在までに86社31万立方メートルの水源地転換が行われ、同量の地下水が削減されました。

こうした水源の転換計画は、全国でも初めての試みで、実績は高く評価されています。

水源転換計画により約31万立方メートル

の地下水が削減された結果、地下水位は徐々に上昇しはじめ、また塩水化も一応減少の傾向をみせはじめました。

しかし、依然として1日約100万立方メートルの地下水が汲みあげられているため、今後さらに地下水の削減が検討されていきます。

また、現在設置されている59カ所の塩水化観測井戸と4カ所の地下水位観測井戸によって監視を続け、さらに監視体制を強化していきます。

今後、各井戸に「水量測定器」を設置し、地下水の汲みあげ量を正確に把握していきます。

合理的な利用を

生活水準の向上や産業経済の進展は、水需要をますます増大させます。

富士市では、「水資源」の大部分を地下水に頼っていますが、地下水は決して無尽蔵にあるものではありません。無計画に利用すれば、再び先のような「地下水障害」が引き起こされます。

私たちが使っている上水道、すなわち「生活用水」は、100％地下水を利用しているのが現状です。

しかも、「地下水源」に代わるダム等の建設は、建設適地、工事費等の関係で困難な状況にあります。

そこで、私たち一人ひとりが節水をはじめ、合理的な水の利用に務めなければなりません。水は、「有限で貴重な資源」です。



江戸時代末期のころの地図を見ながら、当時の村の状況や川の様子を説明する井出源一郎さん（81歳）
（今泉水の上町）

豊富な湧水が

田宿川は、最近、湧水が増えてきたね。一時期は水が減って干上がった状態だった。

昔、ここはきれいな水がたくさん流れていて、田へ水を引いたり、生活用水としていたんだよ。多分、湧水が豊富なため、土手をつくり、川として、生活するために使ったのでは……。

子どものころは、よくここで泳いだり、魚をとったりしたもんだ。



中央図書館の下 田宿川



吉原市民会館ギャラリー

吉原市民会館 富士文化センター に市民ギャラリー

日本画と洋画38点を展示

吉原市民会館と富士文化センターのロビーに、市民会館ギャラリーができました。

吉原市民会館には、日本画17点、富士文化センターには、洋画21点が展示されました。

展示されている作品は、市民の皆さんが応募した作品と市美術展の入

賞作品で、いずれも力作ばかりです。

作品の展示期間は1年間です。

市民会館の荻野館長は、「両館に市民会館ギャラリーができたことで、今までとは違った楽しみ方ができるとおもいます。また、市民文化を高めるのにも役立つのでは……」と話していました。